



「牛乳消費拡大運動」

酪農経営：

新発田市菅谷 中野 浩一氏



我が家は酪農と稲作の複合経営を行っており、自分が就農して早5年が経過しました。また、今年から新潟県酪農組合本所地区青年部の部長を務めています。この5年という短い間にも、国内初のBSEの発生と耳標の一斉装着、家畜排せつ物法の完全施行など、様々なことがありました。さらに、今年度からは13年ぶりとなる生乳の生産調整が始まり、酪農を取り巻く状況は厳しさを増しつつあります。

今回の生産調整は、お茶系飲料に押された牛乳消費量の減少が主な理由です。我々青年部としても消費拡大のためにできることはないかと検討しました。その結果、これからは生産者自らが消費者と向き合い、牛乳の販売促進活動を行うことが重要であると考えました。そして6月24日に新発田あやめまつり会場内で、新潟県産牛乳の試飲と子牛のふれあい体験を行いました。

会場では、県産農協牛乳の200ml入パックを500本と、紙コップに入った牛乳を300個配り、子牛にじかに触れてもらえるスペースを用意しました。やはり牛に実際に触ったことのある人はあまりいなかったようで、子どもはもちろん大人の方々も「かわいい！」と言いながら頭をなでて写真を撮っていました。また、個体識別番号について熱心に質問される方もおり、食品の安全性に対する関心が高いと実感しました。牛乳を試飲した感想としては、美味しいという声を多くいただきました。また、「いつも農協牛乳飲んでますよ」というありがたい声も何人かの方からいただきました。このような、消費者の方々の声をじかに聞けるのも良い経験となりました。

このような消費拡大運動を通じて、消費者の皆さんに牛乳や牛に対する理解を深めてもらい、生産者は商品である牛乳の安全や品質に対する責任感をより強く持てれば良いと思います。これからも消費者と生産者を繋ぐ良い機会として続けて行きたいと思えます。

「人生、好きな牛とともに」

肉用牛経営：

佐渡市羽茂上山田 嶋倉 強氏



高校卒業とともに養豚を始め、昭和63年に牛1頭を購入。3年ぐらい豚や牛を飼養していましたが、平成11年に勤めを辞めて本格的に牛飼いの生活に入りました。退職と同時に増頭、現在は母牛10頭になりました。

佐渡市の羽茂地区は「まるは」ブランドのおけさ柿の産地です。牛のふん尿は堆肥として柿畑に還元することにより、甘くて美味しい柿を生産しています。果樹は土づくりが一番。化学肥料だけでは出ない味が引き出せると思います。佐渡にはJ A佐渡、J A羽茂の2つの農協がありますが、J A羽茂には和牛組合があり、農家数は少ないですが日々活動と研究を重ねています。年3回の佐渡高千市場の前には各畜産農家を廻る巡回指導を行い、各関係機関のご指導をいただいて、より購買者に喜ばれる子牛の生産に努めています。市場の前日の子牛共励会においては、毎回上位入賞を目指して参加出品しています。平成16年から遊休農地の活用として水田放牧を取り入れ、6月から11月まで60aの水田に2頭の母牛を放しています。J A佐渡、J A羽茂とも畜産農家の減少、後継者不足に頭を痛めています。なかなか特効薬は見つかりません。

先日新潟日報に村上牛の記事が掲載されていましたが、身につまされるものがあり、考えさせられる想いでした。

終りに牛飼いの独り言を。保留したい子牛が生まれても実際には保留できません。子牛を販売しなければ生活できないのが現実だと思われそうですが、何か良い施策はないだろうか。増頭の意欲のある人への特別枠など、アッと驚くような方法が。佐渡には高千市場があり、島外へ出荷しなくとも販売できます。漁業を除けば、市場を持つ産業は牛以外にはないのです。大いに高千市場を活用して、残り少ない人生を牛とともに生きて行きたいと思っています。